

本当にmedically unexplained?

片岡仁美

岡山大学病院 総合内科・総合診療科

「不定愁訴」という言葉が好きではなかった。「いろいろと訴えが多い(…大変だ)」といったニュアンスが、どことなく含まれている気がするからである。「不定愁訴」というラベルを貼った時点で、実は隠れているか



もしれない器質的疾患を明らかにする可能性を自ら閉じてしまうような気がして、私自身は不定愁訴という言葉は使ってこなかった。自分への戒め、といった気持ちであった。そのことは、多くの診断が見つからない患者さんが「どこへ行っても異常がないと言われた」「気のせい、年のせいと言われた」「でも本当に症状があるんです。つらいんです」と時には泣きながら訴えられるのを、大学病院で何度も目にしてきたことも影響していると思われる。

最近では「MUS (medically unexplained symptoms)」という概念も浸透してきたが、これについても明確な診断基準はなく、他の病態との重なりもある概念である。なかでも「機能的身体症候群 (functional somatic syndromes : FSS)」は、特に重要な概念である。本特集を企画している時にちょうど発表された西山順滋先生の論文¹⁾は、まさに自分が言語化したかったことが綿密なデータで示されたもので、膝を打つ思いで今回の総論 (p.1300) をご執筆いただいた次第である。FSS を明確に診断することによって、混沌として見える MUS の中に、一連の共通性をもった疾患群が浮かび上がるように思われる。FSS の疾患群は互いに合併することも多く、「中枢性感作症候群 (central sensitization syndromes : CSS)」の概念とも重なることから、共通のメカニズムを有してい

る可能性があるのではないかと感じる。MUS を少しでも可視化できたらという思いで、岡田宏基先生 (宇多津病院 心療内科、p.1328) が提唱された概念図を、岡田先生とともにアップデートして掲載させていただいた (p.1298)。

また、従来 FSS に含まれ、具体的な病名がつかなかったような病態にも、明確な臨床診断基準が提唱され、biological な解明が進んできたものもある (p.1298)。MUS の概念は定期的に見直され、アップデートされることが必須であろう。本特集はあくまで 2022 年時点での考え方の整理であり、将来的にさらなる解明が進めば変化していく概念であると考えている。私たちは、「本当に不定愁訴なのか?」「本当に medically unexplained なのか?」ということを常に自身に問いかけながら、1 人 1 人の声に耳を傾ける必要があり、それは“自分との戦い” (p.1307) なのでもあろう。一方で、「disease」を突き詰めすぎると、「illness」の視点や「精神疾患」として対処すべき見方から離れていく懸念もあり、本特集では「患者の well-being」という視点 (p.1304) や、「身体症状症」 (p.1358~) についても深めることができるご執筆もいただいた。

MUS は、コモンでありながら未知な部分が残されている、可能性に満ちた領域である。本特集が、日々の“MUS”診療に少しでもお役に立つことができれば幸いである。

◎

文献

- 1) Nishiyama J, et al : Characteristics of outpatients with functional somatic syndromes at a university hospital's general medicine clinic. J Gen Fam Med 23(4) : 268-274, 2022. PMID 35800641